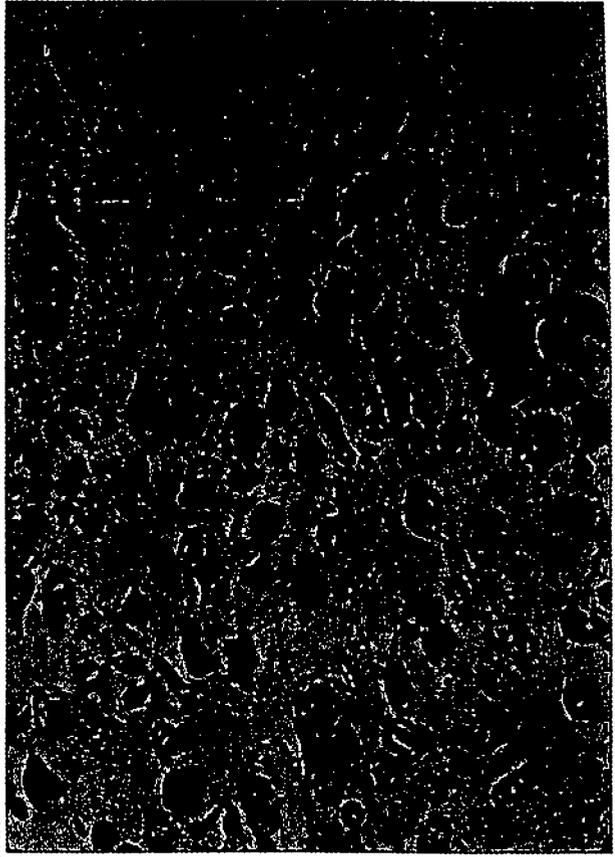
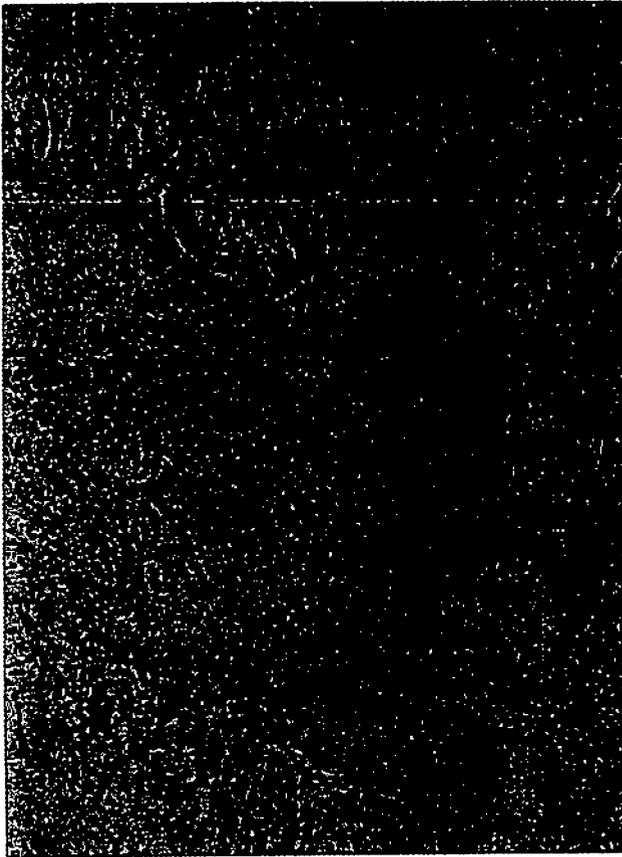


イヌの小腸

東京大学農学部家畜病理学教室出題

第18回獣医病理学研修会標本No.281



動物：イヌ，ベキニーズ雄，2ヶ月。

臨床所見：10日前から元気なく，食欲不振，血様下痢を発したため1977年4月7日に開業医へ来院。抗生物質とビタミンCの治療を受けたが改善せず，4月11日に直腸脱，起立不能となる。4月12日から眼やにがみられ，4月14日朝眼球振盪，死亡。

剖検所見：死後2時間に剖検されたが，皮下乾燥，脱水著明であった。

肺：全葉の辺縁部に赤褐色，硬結部散在。

脾：血量少く，脾材明瞭，汙胞やや不明瞭。

空腸：上部粘膜面に数ヶの出血斑。

回腸：黄褐色粘稠液を容れ，末断部約10cmは結腸内に竦入。

その他著変を認めず。

病理組織学的所見

脾：全体に萎縮像が顕著で，汙胞は壊死におちいり，細網細胞内に弱好酸性の核内封入体を散見。

肺：肉眼的に赤褐色を呈した辺縁硬結部の気管枝・肺胸腔内には多数の好中球，マクロファージなどを

容れ，ときに核内に封入体をもつ巨細胞の出現があった。

消化管：胃・十二指腸には著変はないが，空腸下部から回腸にかけて粘膜上皮の脱落，激しい出血があった。とくに回腸起始部において粘膜下織が，肥厚し多数の組織球の集簇および出血が見られ（写真A），集簇細胞の細胞質および核内にエオジン弱好性の封入体が多数みられた（写真B）。回腸粘膜下織の多数の組織球集簇とその細胞質内・核内封入体形成がきわめて顕著なことから，ホルマリン固定材料について電顕観察を行なったところ，組織球細胞質内にパラミクソウイルス特有のヌクレオカプシドが散見された。

その他の臓器には著変はなかった。

○診断：本例は臨床所見ならびに巨細胞の出現をともなう肺炎所見からジステンパーと診断されたが，提出標本の病理組織学的診断は「組織球の集簇と封入体形成をともなう小腸炎（ジステンパー）」とされた。